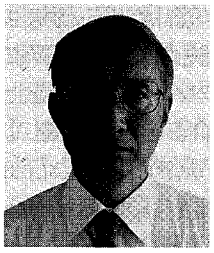
牛枝肉
消費回復遅れ、下げ止まるも同値圏

ミートコンパニオン常務執行役員　植村光一郎氏



国産牛枝肉の卸価格は東京電力の福島第1原発事故で放射性物質に汚染された稲わらを与えた牛肉の流通が判明した2011年7月以降、大幅安の展開となっている。福島県、宮城県など4県の全頭検査体制が8月下旬に整い、出荷を再開した後も、需要回復の兆しがみえない。12年1～3月の市況見通しを食肉卸、ミートコンパニオン（東京都立川市）の植村光一郎常務執行役員に聞いた。

（聞き手は日本経済新聞社　五十嵐孝記者）

和牛の卸値、前年比1～2割安

――国産牛肉の枝肉卸値が軟調だ。

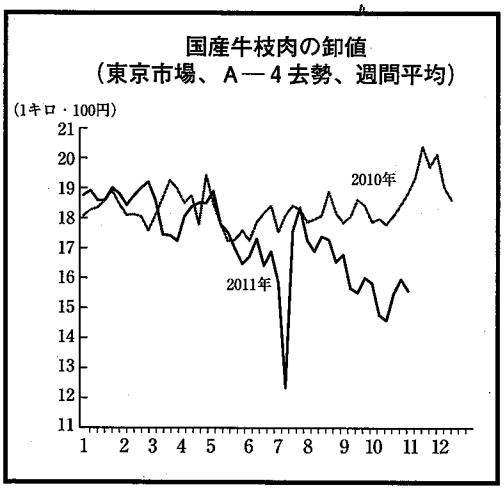
「指標となる東京食肉市場では11年11月中旬時点で高級品の和牛A―4規格（生体、去勢）卸値が1㌔1,500円前後。A―3が1,200円前後だ。9月、10月ごろと比べ1割から2割安い。前年同時期と比べてもほぼ2割安だ。特に福島産はA―4で1,100円前後、A―3だと700～900円と極端に安く、平均卸値を押し下げている」

――福島などの放射性物質の全頭検査体制が整っても需要が回復しないのは。

「消費者が生産者などへの不信感を持ち、国産牛肉への安心を得られないためだ。農畜産業振興機構（東京・港）によると、11年4月から9月までの国産牛肉の推定消費量は前年同期より6%少ない16万5,000㌧。放射性セシウム問題で揺れた8月だけでみると17%も減った。例えば、被災地への応援フェアを実施した大手スーパーで放射性セシウムに汚染された稲わらを与えた牛肉が販売されるなど、むしろ余計に不安心理を生んだ事例もあった。原発事故は畜産農家に大きな被害を与えたが、消費者への配慮が足りなかった面もあった」

「日本で最大級の肉牛肥育数を誇った安愚楽牧場が破産した影響もある。通常、和牛の平均出荷月齢は生後30カ月前後だが、同牧場は資金繰りの問題で肥育期間が短かかったり、餌を十分に与えずに出荷するなど肉質が劣ったものも多かったようだ。農林水産省によると、10月以降の1日当たりの平均出荷頭数は5,000頭前後と、福島などの出荷制限が解除された影響もあって通常よりも1～2割ほど多い状態が続いている」

卸相場は11年11月が底値

――年明け以降の相場はどうなるか。

「牛肉需要は盛り上がらないまま推移する可能性が高く、足元の低い価格水準が続く可能性が高い。歳暮シーズンに入った11月以降も需要の盛り上がりに乏しく、当面厳しい状況が続く可能性が高い。鍋物シーズンの12月から1月は、かろうじて需要が回復し、一時的に卸価格は上昇するが、需要が一巡する1月下旬以降は再び下落基調になり、足元の価格水準まで下がるだろう。ただ、11月上旬あたりの水準が底値でこれ以上下がることはない」